

# ジン・カルチャーの現在的展開とその意義

## ——フェミニスト・コミュニティ・アクティヴィズムの視点からの展望

村上 潔

### I 本稿について

#### 1 本稿の構成

本稿は、2021年2月18日（木）に開催された、2020年度立命館大学国際言語文化研究所リレー講座1日目第2幕《書いて配って世界を変える——Zine・ミニコミ・フェミニズム》における講演「フェミニスト・コミュニティ・アクティヴィズムとしてのジンとその実践」の内容を加筆修正したものである。

なお当日の講演資料は、<http://www.arsvi.com/2020/20210218mk.htm>（2021年2月2日掲載、以降随時更新。立命館大学生存学研究所データベース内）に掲載している。これには、講演内容だけでなく、「参考／関連」情報、「ディスカッションの補足」、「質問への回答」、「企画を終えて」といった内容を掲載しているので、ぜひ本稿とあわせて参照していただきたい。

#### 2 講演にあたって（2021年2月2日掲載）

以下は、講演に先立ち、筆者の問題意識をまとめた趣旨文である。

本講演では、近年の世界的な動向から、ジンがフェミニスト・コミュニティ・アクティヴィズム [Feminist Community Activism] の（主要な）一要素として位置づけられることを確認し、ジンをめぐる実践の多様な可能性を指摘する。また、歴史的な連続性という視座に立ち、人種／性／身体／階級／植民地主義といった問題に対し個人もしくはコミュニティの自律的出版活動は、①いかなるアクションを起こし続けてきたのか、②それらはなぜフェミニズム実践として評価しうる（／すべきな）のか、そして③現在の激動する世界状況において（も、なお）いかなる変革的推進力を有しているのか、といった点について提言を行なう。そこでは必然的に、日本のジン・シーンがもつ課題も浮き彫りとなってくるだろう。そのうえで、私たちは過去の／現在の／周辺分野のどのような運動／営みにアクセスし、学び、継承し、共闘していくべきであるのかについて、他の講演者・参加者の方々と議論していきたい。

先に結果を述べると、「日本のジン・シーンがもつ課題」については言及する余裕がなかったが<sup>1)</sup>、それ以外の点に関しては概ねカバーできたと考えている。

## Ⅱ はじめに

最初に、本講演の資料ページの上の方に、「講演の前に——前提の共有のために」として、3つリンクを貼っておきました。もうご覧になっていただけている方もいらっしゃるかもしれませんが、これに関して簡単な説明を加えておきます。

まず、一つ目の「ジン [Zine] についての簡潔な解説【第7稿】」(<http://www.arsvi.com/2010/20180906mk.htm>)という2019年に書いた文章ですけれども、これはまさにそのタイトル通り、辞書的な説明になります<sup>2)</sup>。ごく簡潔にジンに関する辞書的な解説を読みたいというかたは、まずこちらを読んでいただければと思います。

次に、「ジン [Zine (s)] ——その世界の多様性と可能性」(<http://www.arsvi.com/d/zine.htm>)というページですが、こちらは私が随時、数日おきに更新しているページで、最新の世界的な（主に英語圏の）ジン・カルチャーの動向について、その情報をカテゴライズしてまとめたページになっています。作成してからもう2年近く経っていて、膨大な量になっているので、知りたい情報を探すのが大変かもしれませんが、ブラウザのページ内検索機能を活用したりしていただければ、それなりに使えるページになっているかと思います。

先ほど野中モモさんの説明のなかにもあったとは思いますが、ジンの歴史・種類・系譜であったり、ジン・カルチャーのこんにちまでの発展の経緯であったり、そうした内容に関しては一つ目のページを、そのなかにあるさまざまな具体的な問題系、ジンに関わる多様な要素一つ一つに関する説明は、二つ目のページを見ていただければと思います。

また、先に言ってしまうと、今日お話しする内容や、これまで私がまとめてきたことをわかりやすく教科書的に書いたものがあって、それは近々出版される『ガールズ・メディア・スタディーズ』(田中編 2021)という本に掲載される文章(村上 2021a)にあたります。これは大学生向けの教科書として書かれてた共著本で、本当はこの企画に刊行が間に合っていればよかったんですけど、残念ながらそうならなかったのが、後日チェックしていただけると幸いです。

## Ⅲ ジンとの出会い、フェミニズムとの接続

では報告を進めていきたいと思いますが、時間が限られているのであまり無駄なことは話せないんですけども、ジンはパーソナル＝個人的な文化ですので、少しだけ個人的な話をさせていただきます。

私とジン・カルチャーとの出会いは、たしか2000年代後半に、先ほどご講演された野中モモさんの活動を取り上げた雑誌の記事を読んだのがきっかけだったと思います。そこで紹介されていた、モモさんが運営されている〈Lilmag〉のサイトを見て、そのなかのジンのリストから気になったジンを注文したところから、私とジンの付き合いが始まりました。ですので、私にとってモモさんは恩人というか、私がいまこういうところでジンについて喋ったり、ジンに関する文章を書いたりするのも、モモさんのおかげと言っても過言ではないと思います。

そのなかで、これはいまでも〈Lilmag〉のベストセラーと言っているはずですけども、大垣有香さんというクィアパンクのかたが2005年に出された『riot grrrl』というムーブメント――

『自分らしさ』のポリティックス』というジンがあって、これはいまだに日本語で書かれたライオット・ガール文化に関する最適な入門書ではないかと思います。もちろん英語では、ライオット・ガールに関する本や、ライオット・ガールとジン・カルチャーとの関係性を説いた文献はそれなりにあるんですけども、日本語でまとめたかたちでライオット・ガールについて書かれたものということになると——さらに言えば、ただ情報を伝えるだけではなく、個人的な経験や想いも込みで綴られている意義を考えても——、このジンを読んでいただくのがおそらくいちばんいいだろうと思っています。こうしたジンにつながる事ができたのも、モモさんとの出会いから、ということです。

私はもともと、東京で音楽ライターの活動をしていた時期があって、そこでは2000年代前半のポスト・ライオット・ガールのフェミニストDIYミュージック・シーンや、それに関連する文化動向を追いかけたりしていました。実はジン・カルチャーというのが、そうした2000年代やそれ以前のフェミニストDIYミュージック・シーンの流れととても密接に関わっている、接続する文化であるということ、あとから気づくことになったわけです。そういう意味で、よく考えてみると私の活動というのは、実は長期的にジン・カルチャーと共にあったんだな、と感じるところがあります。

あと、私は2004年に東京から京都に拠点を移したんですが、その後、1970～80年代の京都におけるウーマンリブ運動の資料整理に携わることとなります(村上2021b)。そして、その成果をもとにして、ウーマンリブ運動と「文化」の関係を論じる機会も得ました(村上2014a・b・c)。こうしたこともまさに、ジン・カルチャーとの接続点としてあったわけです。

ライオット・ガール・ムーヴメントは第3波フェミニズムにあたりますが、その前の第2波フェミニズム、ウーマンリブ運動における機関誌、パンフレット、ビラ、個人発信の通信などは、現在のジンの先祖に位置づけられるものです(Piepmeyer 2009 = 2011)。これは日本でも海外でも同様で、ジンのアーカイヴィングに関わる人たちの多くはこうした資料も収集・整理・保管の対象としています。つまり、私の京都に来てからの活動・研究も、まさにジン・カルチャーの一環として位置づけることができるとしています。以上が前置きになります。

#### IV リアルタイムのトピック

では、本題に入っていきたいと思います。

私はこの講演では、歴史的なことよりも——それは先ほどモモさんに基本的なところをおさらいしていただいたので——、リアルタイムの世界的な動向をなるべく強調していきたいと思っています。

そこで、現在のジン・カルチャーに関する特に注目すべきリアルタイムのトピックを、数点のキーワードを挙げるかたちで解説したいと思います。それぞれは大きな問題なんですけど、時間の都合上簡潔にまとめていきます。それぞれの点が気になるかたは、先ほど挙げた2つ目のリンク、現在の世界的なジン・カルチャーのシーンを紹介している私のページを参照してください。

まず1点目は、「クウォランジン [Quaranzine]」です。これは何なのか、みなさんおそらく

わからないと思います。それもそのはずで、これは「Quarantine [クウォランティン]」と「Zine」を組み合わせた造語になります。「Quarantine」については、まさに去年の春以降、そして現在もそうですが、新型コロナウイルス感染症の影響で、世界中の人々が（感染の有無にかかわらず）いわゆる「自主隔離」(Self-Quarantine) という生活を送ることになりました。そうした隔離状態の期間・状況のなかで——それを主題として——作成されたジンを「クウォランジン」と呼びます。

したがって、当然ながら非常にパーソナルな、内面的な要素が強く出るわけですね。人によっては孤独感を抱えていたり、そうした環境のなかで否応なく自分を見つめ直したり、改めて人とのつながりを意識したり。あとはいまの世の中、資本主義であったり、国家的な統制であったり、福祉や医療の問題、労働——特にケアワーク——の問題、ヘルスケアの管理の問題。そして自身が抱えるメンタルヘルスの問題。そうしたさまざまなことを、この期間、みんなが考えた。その考えたことを個人的に表現したり、SNS等で隔離状況についての文章やアートを募って一つのコンピレーション・ジンにまとめたり、そのデータをオンラインで公開したり<sup>3)</sup>。そういった取り組みが去年から今年にかけて、いままも継続していますけれども、非常に活発に行なわれました。アメリカの〈バーナード・ジン・ライブラリー [Barnard Zine Library]〉は、2020年4月の段階から女性とノンバイナリーの人々によって作成された COVID-19 に関するジンを収集し——のちに「クウォランジン」としてカテゴライズし——、アーカイヴィングを進めています (Barnard Zine Library 2020a・2020b)。このほかにも、アメリカ・イギリスを中心に多くのジン・ライブラリアンやアーキヴィスト、ディストロ運営者がクウォランジンに注目しています (Braun 2021; Cheung 2020; Dobush 2020; Figa 2020; Kirby 2020; Murrell 2020; Rosenberg 2020)。

そして2点目は、ブラック・ライヴズ・マター [Black Lives Matter] であったり、アボリションイズム [Abolitionism] の運動、こういった（世界的な）運動のなかで、特に直接的な抗議行動やその抗議行動を支援するリアルな現場において、改めてジンが強く機能したという点です (Chisholm and Suchodolski 2020; Sherwood Forest Zine Library n.d.)。ラディカルな直接行動とその支援の現場では、なんでも SNS で済まされてしまいそうに思える現在においてもジンというものが非常に有効なツールなのだ、ということがはっきりと確認されたことは、大きな意味があります。

また、去年・今年と、南米など世界各国で女性の中絶の権利 (Abortion Rights) をめぐる大規模な運動が起きました。これも非常に大規模な抗議行動・集会在開催されたので、みなさんも国際的なメディア、ニュースでご存じかなと思います。そうしたこともあり、ジンの世界でも「女性の身体」への焦点化というものが起きました。ジン・カルチャーは当初からずっと——現在のジンの先祖に位置づけられるパンフレット類を含めて——女性の身体、特に再生産 (リプロダクション) の機能・権利というものを大きな主題として抱えてきたわけなんですけど、特にこの間の中絶の権利をめぐる大規模な運動の動向と連動して、そうしたテーマのジンがさらに活発に作られるようになっています。

それから、これはモモさんの講演のなかにも出てきましたが、昨今のフェミニズムをめぐる状況のなかで、特に注目されているインターセクショナリティ、交差性という概念ですね。交

差性差別のようなものをどう捉え、問題化していくのか、当事者としてどのように語っていくのか、といったことです。それはもちろんジンのテーマにもなるし、そういった問題意識で集まったコレクティブ単位でジンを作る、ということもあります。WOC (Women of Color) = 有色人種女性、先住民女性、障害女性、それから QTPOC (Queer and Trans People of Color), クィア・ムスリム [Queer Muslim], 労働者階級のクィア (Working Class Queer), そういった複合的・交差的な属性をもっている人たちのジンやジンに関する取り組みというのが、近年非常に増え、活発になっています。これもさかのぼれば第3波フェミニズムの頃からということとは言えますが、近年のフェミニズム理論——ならびに当事者たちの運動——の動向が影響していることはたしかでしょう (Ahmed 2021; Gamble, Williams and Sumruud 2018; Liu 2020)。

インターセクショナルリティと並ぶキーワードをもう一つ挙げるならば、「デコロナイズ [Decolonize/Decolonise]」, 「デコロナイゼーション」ということになります。脱植民地化、ですね。ジン・カルチャーには、白人 (男性) 中産階級中心主義的であった過去があり、現在でもそれが克服されたとは言い難い面があります。もちろん、そうした問題に対する批判は強くあったし、いまもあります。それが近年、ジン・カルチャーに関わる人たちの間で——残念ながら日本ではそう言える状況ではないですが、英語圏やスペイン語圏では——全面的に共有されるようになった、ということです。単に人種的な問題だけではなく、過去の植民地主義やその後のポスト植民地主義に起因する、(労働や教育や社会運動・文化活動の場での) 構造的な差別・抑圧・序列化のありようを、現実的な事象として問題提起し、問いかけ、変革に向けた議論を喚起する、という動向が、ジンのテーマとして、そしてジンに関する活動のなかで、展開されています。ロンドンでは年に一度《Decolonise Fest》という DIY パンクのイベントがあるのですが<sup>4)</sup>、ここでもジンは大きな役割を担っていて、重要な位置を占めています。言葉で白人中心主義を批判するだけでなく、集合的な・連帯的な行動を通して脱植民地化の実践を進めていく過程は、非常にダイナミズムを感じさせますし、大きな意義をもっていると思います。

それに関連して、最近注目されているのが、インディジナス [Indigenous]・ジン、つまり先住民族のジンです。先住民族に対する支配・迫害の歴史を問題化し権利の回復に向けた主張を展開するもの、先住民族の伝統的文化 (の継承) をテーマとしたもの、先住民族の人々の文化・表現活動の促進を目的としたもの、などがあります (Kabatay 2021)。それは当然、過去・現在の植民地主義を批判し、それに対抗する意味をもちます。

## V 問題となること、問題を克服するジン・カルチャーの力

### 1 何が／なぜ「新しい」とされるのか?——そこで見過ごされるものは何か

続けて、少し違う視点から話を進めて、いまの話とつなげていきたいと思います。最近、というか定期的に、ジン (・カルチャー) が「新しい」文化であると、よく言われます。今日の企画の告知の文章でも、いま新たに若者からジン・カルチャーが注目を集めている、という書かれかたをされています。簡単に言うと、そういうもの言い・発想というものに対しては、ジン・カルチャーにずっと関わっている人たちは、やはり批判的に見るわけですね。

ジンを「新しい」と言ってしまう、「若者の」文化と言ってしまうことは、単純にいろいろな

ものをスポイルしている、そぎ落としているわけですね。ジン・カルチャーのようなアンダーグラウンドな文化は、つねに都合よく「再発見」とか「再評価」されてしまう宿命にあって、それは特に商業メディアのジャーナリズムやアカデミズムからなされるわけです。やはりそういった見方のなかには、消費主義であったり、能力主義であったり、白人中産階級（男性）中心主義といったものが、どこかに根強くあるので、いわゆるジンスター [Zinester] と呼ばれるジンに関わる活動をしている人たちは、つねにそうした動きに対して批判的な姿勢をとっています。それは、ジン・カルチャーに脈々としてあった側面、たとえば労働者階級の文化であるという面や、白人・健常者・異性愛者以外の抑圧された人々の表現手段であるという面の、歴史的な意義と、その歴史を築いてきた人々の存在そのものを、なかったことにさせない——言い換えれば、不可視化させない——という強い意志があるからですね。

それは、先に述べた「インターセクショナリティ」や「デコロナイズ」が強調されている現象と同じ土壌のもとにあると言えるでしょう。マイノリティの存在や文化は、つねに支配的な側から「発見」され、「評価」され、「消費」され、場合によっては「利用」されてきました。よって、ジン・カルチャーに関わるということは、否応なくそうした権力（的）構造の存在と仕組みを意識させられ、それへの対抗、そこから自立するための模索を余儀なくさせられることだと、言ってしまうてもよいかもしれません。そう考えると、現在のジン・カルチャーのありようを捉え、展望するうえで、中心に大きな柱として「フェミニズム」を据えてみることは、やはり必然的に導き出される方向性でしょう。そこで以下に、フェミニスト・コレクティブ・アクティヴィズムとしてのジン・カルチャーの可能性というものを、簡単にまとめていきたいと思います。

## 2 ジンがもつ問題喚起の力——特にフェミニズムの立場から

そもそもジンというものは、人種の問題や性の問題、身体の問題、それから階級の問題、植民地主義の問題、環境の問題、いろいろな見えない抑圧の問題——マイクロアグレッションという言葉も最近よく使われるようになりましたが——、そうしたさまざまな根源的な問題を普遍的に喚起する、問題喚起の力を備えているわけです。したがって、フェミニズムであったり、各種社会運動、アナキズム、パンク・カルチャー、そういったものと非常に親和性が高く、それらのなかで活用されて、展開していくという運命をもっているんですね。先ほどブラック・ライヴズ・マター等の話でも述べたように、抵抗の現場、ラディカルな運動（直接行動）の現場、その支援の現場、そういった現場やそれを取り巻くネットワークのなかで実質的・実践的に活用されるツールだということです。

そして、これは特に女性、フェミニズムの立場から見て重要な点になりますが、そうしたつねに世界中に存在する「運動」——規模の大小、有名無名を問わず——の「なかでの」差別・抑圧・排除・暴力、これはどうしても存在します。性差別、人種差別、障害者差別、トランス排除、性暴力といった問題ですね。または、一見民主的に見える組織が、実は一部の高学歴男性の支配的な運営によって成り立っていたり、いろいろな様相の問題があります。そうした差別・抑圧といったものをテーマにした、もしくはそうした被害に遭った当事者たちが自主的に集まって作成したジンというのは、古くからあります。

つまり、ジンは当然、運動そのものとして力を発揮するわけですが、同時に、運動のなかに

ある——差別・抑圧・排除・暴力といった——問題を提起していくうえでも大いに力を発揮する、その際に中心となるのがフェミニズム的な立ち位置だ、ということです。その動きのなかでは、運動への批判だけでなく、必然的に相互扶助的エンパワーメントの構造が生まれ、育まれていきます。フェミニストのジン、フェミニストのコレクティブによるジンの活動というものが最も力を発揮するのは、まさにこうした点においてでしょう。

### 3 アクセシビリティ

ジンについて定義するうえで、またジン・カルチャーの特性を語るうえで、非常に大きなポイントとなる要素の一つとして、「アクセシビリティ [Accessibility]」があります。どれだけ多くの人々が——できる限り「すべて」に近い人々が——アクセスできるか、しやすい環境にあるか、ということですね。

いちばんわかりやすい単純な問題としては、経済的な点が挙げられます。お金のない人としても入手できないような高い値段がつけられたジン、高い入場料・出展料が設定されたジンフェスト。そうしたものは当然、批判の対象になります (Casio 2017 = 2018)。次に、物理的・環境的な問題があります。ジンに関する取り組み、たとえばワークショップやジンフェスト (フェア) の会場が、車いす対応かどうか、その企画が手話通訳対応かどうか。小さい子どもを連れて長時間過ごせる環境、メンタルヘルスの問題を抱えた人が参加しやすい環境が整えられているか。そうした点もアクセシビリティの問題です。

そのようなアクセシビリティを担保するためには、会場の選定に始まり、運営の体制を整えること、専門家の協力を得ることなど、いろいろとやる必要があります。物理的な面——建物の構造など——に関しては改良の限界がありますが、環境的な面、つまり開かれていてかつ安心できる空間づくり、ということに関しては、主催者の意識や努力によってかなり条件を向上させることが可能です。特に重視されるのが「セーフター・スペース [Safer Space]」という概念ですね。誰もが安心してそこにいられる空間、差別・抑圧・排除・暴力のない空間を目指す取り組みです。あらかじめ起こりうる問題を抑止するための「セーフタースペース・ポリシー」の周知徹底や、問題が起こった際に対処する「アフィニティ・グループ [Affinity Group]」の構築などが具体的な手立てとなります (村上 2020c)。

こうした取り組みは、ジン・カルチャーにおいては現在、世界的に——日本も含め、とはっきり言えないところが残念ですが——一般化していますが、アクセシビリティを重視するとか、セーフター・スペースをつくるとか、そうした取り組みも、もともとはウーマンリブ運動、第2波フェミニズムから続いている、フェミニストのコミュニティがいろいろと創意工夫をして作り上げてきたものを活用・援用している、ということは認識されてよいでしょう。こうした点からも、ジン・カルチャーとフェミニズム、特にフェミニスト・コミュニティのアクティヴィズムというものが、きわめて実質的に密接な関係にあることがわかつていくと思います。

### 4 身体性・親密性・自律性

さらに、ジンとフェミニズム、フェミニスト・コミュニティとの関係性ということでは、身体性・親密性・自律性という点が注目されます。この3点はジンというメディアそのものの特

色でもあり、ジン・カルチャーのなかで重視されるものでもあります。

身体性という点においては、特に女性身体の再生産機能がクローズアップされます。国家的な政策や医療制度の問題によって、女性の再生産機能が危機的な状況に置かれたり、不当な介入を受けたりする。そこで、「わたしのからだ」に介入するな、自分で決めさせろ、と主張する必要が出てくる。そうしたことを強く、迅速に、しかし同時に個人としてのリアリティを大切にしつつ問題化していく際に、さあジンの出番、となるわけです。また、そうしたジンの（共同制作の）なかで、もしくはジン（の授受）を通して、同じような状況にある他者と理解を深めあい、励ましあい、助けあっていく。そうした親密な関係性が築かれていきます。

したがって、ここには、

- ①ジンそのものが（人の手によって作られる）身体性を強く帯びたメディアであることと、その主たるテーマとして身体性が取り上げられること。
- ②身体の自律性について自分が考えていることを、自分の手でかたちにして発表する、表現の自律性。
- ③ジンを作る過程で——一人で作っている場合でも、見えない読者をイメージして——、そしてジンを共有していくなかで構築される、親密で相互扶助的な関係性。

という、重層的な構造が存在します。これは確実にジン・カルチャーの醍醐味の一つと言っ  
ていいでしょう。

これはもちろん「女性」に限られたことではなく、ノンバイナリー／トランスの人々や、なんらかのヴァルネラビリティ（脆弱性）を抱えて生きている人々には共有される事象です。ただその基軸として、フェミニズム（の観点・手法）があるということです。ジンを切実に必要としていて、ほかならぬジンによってつながることに強い必然性をもっている存在というのは、やはりどこかでフェミニズムにつながっているのだと思います<sup>5)</sup>。

## Ⅵ フェミニスト・コレクティヴ・アクティヴィズムと（しての）ジン・カルチャー

### 1 現場で醸成する、コミュニティを醸成させる

そろそろ時間が迫っているので、まとめに入っていきたいと思います。以上のように、ジンの特質、ジン・カルチャーの特質というものと、フェミニズムの実践における成果というものが、非常に合致している状況があって、そうした土壌があるうえで、いま、これから私たちはどのようなコレクティヴ・アクティヴィズムを構築していくのか、それによってどういうコミュニティを形成していくのか、ということですね。特にフェミニスト・パースペクティヴに基づいたコミュニティ・アクションのありかた、ということを実践的に考えていかなければいけないと思います。

そこでは、労働、生活、社会運動、さまざまな支援、ケア、それから相互扶助といったものが切り離せないかたちで、ジン・カルチャーに付随してくるだろうと思います。つまり、ジン・カルチャーというものを文化的な事象として——時には「アート」という括りに囲い込んでしまっ  
て——独立的なもののみならず、そこには上記のような要素が必然的に連結しているんだと、まずは認識すること。なぜなら私たちは、フェミニストは、先に述べたように身



体性・親密性・自律性を重視し、それに基づいた社会を展望しているからです。労働、生活、運動、支援の「現場」のなか（もしくは周辺）で、ジンというものは自然と生まれ、育まれ、そこに緩やかにジン・カルチャーが醸成していく。こういう認識を共有する必要があると思います。

そう考えたときに、ちょっと面白い視点として挙げられるのが、「サード・スペース [Third Space]」に関する議論です。ジンはサード・スペースだということを、アデラ・C・リコーナという人が主張しています (Licona 2012)。ジンならびにジンを取り巻く環境はサード・スペースであり、それは差別・抑圧や不正義が横行する現実の世界を抜本的に正していく、それらと対抗していく世界＝空間なのだ、という位置づけです。そこでは社会正義 (Social Justice) の取り組みや、傷ついた自己／他者を癒やすこと、回復させること、何らかの愉 [たの] しみを見出すこと、みんなで愉しみを分かちあうこと、などが展開されていく。

その現実の拠点として、ジンのワークショップやジンフェストなどが開催されるインディペンデントなソーシャル・スペースという空間がもちろんあるのですが (村上 2018)、それ以外にも、たとえば先に述べたクウォランジンのようなものをふまえて考えれば、私たち一人一人の小さな部屋であったりとか、キッチンテーブルとか、シェアハウスの居間のこたつとか、それから、それこそ家がない——もしくは家に居場所がない——人にとっては、公園のベンチであったりとか。そういうところだって立派なサード・スペースであり、ジンを生み出す拠点になるわけですね。つまり、そこが抵抗の砦にもなる。そして同時に、世界的なジン・コミュニティの一つのハブ [Hub] にもなるということなんですね。このへんは、またディスカッション等話を深めてみたいと思うので、ひとまずそういったおもしろい——だけでなくきわめて有効な——論点があるということを知っていただければと思います。

そう、ジンのコミュニティというのは、物理的距離を越えて展開する可能性を有しています。もちろん前提として、ローカルなコミュニティは大事です。ローカルな、顔の見える関係のコミュニティ。そのなかでジンを手渡しで交換したり、みんなで共同でジンを作るという活動は大事。ただ、それだけだと、こういうクウォランティンの状況においては、それは機能しない、崩壊してしまう、なくなってしまう、ということになる。でも、そうではない。ジン・カルチャー、ジンのコミュニティというものは、こういうときでも強固に生き続けているし、より強くなれる可能性、ポテンシャルをもっているわけですね。物理的距離を越えて連帯し、エンパワーしあえる力を、ジン・カルチャー、ジンのコミュニティはもっています。それは昨年から今年にかけて、実証されたのではないかと思います<sup>6)</sup>。

そしてまた、逆の見方をすれば、既存の地域の文化的コミュニティとか、社会運動のコミュニティといったものを、より批判的に発展させていくうえで、そういった物理的距離を越えたジン・コミュニティのような存在は非常に有効なのではないか、という議論が可能になります。世界的なジン・コミュニティという単位で、いろいろな理論や方法論を共有して、運動の成果を共有して、課題を確認しあい、支えあうことによって、足元にある既存のローカルな運動やコミュニティを批判的に捉え返したうえで、それらを発展させていくということは可能なのではないか、それがいま希求されているのではないか、ということですね。

## 2 フェミニスト・パースペクティブ

ジンというのは物理的には一つ（一束）の——多くの場合質素なつくりの——「モノ」ですが、それは作った／読んだ個人を変える力をもっている。ジン・カルチャーというのは、ジンというモノやジンに関する活動を通して、コミュニティを変える力をもっている。大げさに言うと、それらは「世界」を変えていく可能性を秘めている、ということです。

フェミニスト、そしてトランス／クィアのアクティヴィストたちは、そのジンの潜在力を強く認識しており、意識的に活用しています（村上2019・2020b）。それは、歴史的・現在のフェミニストたちの活動や理念や理論、それに基づくフェミニスト・パースペクティブというものが確固たる軸としてあるからだ、と言えるでしょう。資本主義・家父長制・性役割規範、そういったものと長きにわたり闘うなかで、戦術として、武器として、ジンのような性質のメディアを使うことで、運動（の意識）を叩き上げ、磨き上げ、成形してきた。そして、その過程において、社会正義の理念を体現するセーフスペースの構築であったり、相互扶助的な体制づくり、自律性に基づいた連帯のネットワーク形成、といった模索が展開されてきた。

上記のような経緯によって、ジン・カルチャーは質的・量的に発展してきたし、今後もさらなる発展を遂げる——言うまでもなく、それは「メジャーになる」といったことではなく——ことが可能であろうという、希望的な展望が私にはあります。そのうえでの課題に関しては、これから深めていきたいと思いますが、ひとまずそうした展望を示すことで、私のこの講演は終わりたいと思います。

## Ⅶ おわりに

以上、当日の講演内容に即してまとめてきた。最後に、上述の「展望」について少し補足しておきたい。

フェミニスト・コミュニティ・アクティヴィズムとジン・カルチャーの連関的な展開のありかたについて、筆者はフェミニスト・パースペクティブに基づき以下のような展望をもっている。それは、両者が共にこれまで以上に、

- ①「生存維持 (Subsistence)」——ハウジング、マザリング、家事労働、ケア、環境保護といった——の問題と密接なものになっていくこと。
- ②自身やコミュニティの「防衛」と、そのために必要な運動の「拡張」——広範なネットワークの強化——に力を注いでいくこと。
- ③自身やコミュニティの「自律性」と「連帯性」を同時に高め、確保していくこと。

の3点の方向性を推し進めていくことになるだろう、というものだ。その具体的な論証は、今後、別の機会にまとめたい。いずれにせよ、歴史的・現在のフェミニスト・コミュニティ・アクティヴィズムの実践に基づいて、ジン・カルチャーの課題を析出し、可能性を広げていく作業を、継続していきたいと考えている。

### ■注

- 1) この点については、西山・村上(2016)、野中(2019)、Erdogan(2020 = 2020)を参照してほしい。

- 2) 村上 (2020a) のもとになった文章でもある。
- 3) 筆者がファシリテーターを務める〈Morning Zine Circle〉でも、2020年5月と12月の2度にわたって、『M.Z.C. Quaranzine』というコンピレーション・ジンを作成し、オンラインで公開した(香月2021)。〈Morning Zine Circle〉については、<http://www.arsvi.com/d/2016mzc.htm>を参照してほしい。
- 4) 2020年は9月1日～6日に開催(Decolonise Fest 2020)。2021年度の開催に関する情報はまだ発表されていないが、運営メンバーのうち3人が4月14日に開催された《Glasgow Zine Fest 2021: DIY Decolonial Publishing with Decolonise Fest》に参加している。公式サイト：<https://decolonise.org.uk/>
- 5) もちろん、女性の身体性という意味では、性暴力の問題を抜きに考えることはできない。この点に関しては、筆者が作成している資料ページ「性的暴行ならびにそのサヴァイヴァー支援に関するジン——性的同意の問題も包括して」(<http://www.arsvi.com/d/zinessa.htm>)を参照してほしい。
- 6) その一例として、筆者は、2020年7月に〈Zine Librarians unConference〉の活動の一環として開催されたワンデーイベント《International Zine Library Day 2020》(7月21日 UTC 20:00～同22日 UTC 4:00)内の企画“[Panel] Zine Libraries and Zine Librarianship”にパネラーとして招聘され、スピーチを行なった。ここで筆者は〈Morning Zine Circle〉ならびにサークルが運営するジン・ライブラリーについて紹介し、参加者からの質問に回答した。その内容は、<http://www.arsvi.com/2020/20200722mk.htm>を参照してほしい。

## ■文献

- Ahmed, Safia. (2021). Testing the Waters: The Process of Publishing a Quaran-Zine. *El Camino College The Union*, September 22, 2021, (<https://eccunion.com/arts/2021/09/22/testing-the-waters-the-process-of-publishing-a-quaran-zine/> [最終閲覧日：2021年10月1日]).
- Barnard Zine Library. (2020a). Who Better to Document This Experience Than Everyone. *Barnard Zine Library*, April 3, 2020, (<https://zines.barnard.edu/news/who-better-document-experience-everyone> [最終閲覧日：2021年10月1日]).
- . (2020b). Quaranzines Coverage. *Barnard Zine Library*, June 4, 2020, (<https://zines.barnard.edu/news/quaranzines-coverage> [最終閲覧日：2021年10月1日]).
- Braun, Jolie. (2021). Unconventional Collecting in Extraordinary Times: Documenting the Pandemic Through a COVID-19 Zine Collection. *College & Research Libraries News*, 82 (8): 354-361. doi: 10.5860/crln.82.8.354.
- Casio, Holly. (2017). The Economy of Zines. *Cool Schmool*, March 9, 2017, (<https://coolschmool.com/news/economy-of-zines> [最終閲覧日：2021年10月1日]). = (2018). 村上潔訳「ジンの経済」, [arsvi.com](http://www.arsvi.com) : 立命館大学生存学研究所, 2018年6月20日更新, <http://www.arsvi.com/2010/20180620mk.htm>
- Cheung, Ysabelle. (2020). Enter the 'Quaranzine': Zines That Boost Resistance, Mutual Aid, and Self-Care. *Hyperallergic*, April 30, 2020, (<https://hyperallergic.com/560443/enter-the-quaranzine-zines-that-boost-resistance-mutual-aid-and-self-care/> [最終閲覧日：2021年10月1日]).
- Chisholm, N. Jamiyla and Veronica Suchodolski '19. (2020). Leading the Way. *Barnard College*, June 22, 2020, (<https://barnard.edu/news/leading-way> [最終閲覧日：2021年10月1日]).
- Decolonise Fest. (2020). *Decolonise Fest Zine 2020: Resistance Edition*. Decolonise Fest.
- Dobush, Grace. (2020). Quaranzines: Pandemic Inspires Analog Zine Projects. *Craft Industry Alliance*, November 2, 2020, (<https://craftindustryalliance.org/quaranzines-pandemic-inspires-analog-zine-projects/> [最終閲覧日：2021年10月1日]).
- Erdogan, Elif. (2020). Against the Mainstream: Feminist Zines in Japan. *Voice Up Japan*, June 29, 2020,

- (<https://voiceupjapan.org/2020/10/03/feminist-zine-japan/>). = (2020). 大島アイシェ 翻訳「主流に抗う——日本のフェミニスト・ジン」, 『Voice Up Japan (日本語版)』2020年10月3日更新, <https://voiceupjapan.org/ja/2020/10/03/feminist-zine-japan/> \*2021年12月20日時点では, 右記2点のページは削除されており, <https://voiceupjapan.org/ja/feminist-zine-japan/> に英語版が掲載されている。
- Figa, Alenka. (2020). Quaranzines Will Keep Us Connected: An Interview with Jenna Freedman. *Women Write About Comics*, July 31, 2020, (<https://womenwriteaboutcomics.com/2020/07/quaranzines-jenna-freedman/> [最終閲覧日: 2021年10月1日]).
- Gamble, Mya; Williams, Lola; Sumruld, Autumn. (2018). Intersectionality. *Women's Studies, Feminist Zine Archive*, 54, ([https://digitalcommons.chapman.edu/feminist\\_zines/54](https://digitalcommons.chapman.edu/feminist_zines/54) [最終閲覧日: 2021年10月1日]).
- Kabatay, Jasmine. (2021). Indigenous Woman's Zine Series Gets Response That 'Makes Her Heart Flutter'. *CBC News*, January 17, 2021, (<https://www.cbc.ca/news/canada/london/indigenous-woman-s-zine-series-gets-response-that-makes-her-heart-flutter-1.5873482> [最終閲覧日: 2021年10月1日]).
- Kirby, Megan. (2020). The Quarantine Scene: How Chicago Zinemakers Are Adapting to the Pandemic. *Chicago Reader*, July 4, 2020, (<https://www.chicagoreader.com/chicago/quimbys-virtual-zines/> [最終閲覧日: 2021年10月1日]).
- Licon, Adela C. (2012). *Zines in Third Space: Radical Cooperation and Borderlands Rhetoric*, New York: State University of New York Press.
- Liu, Helena. (2020). 11 Intersectional Feminist Zines and DIY Guide (with Template), *Disorient*, December 6, 2020, (<https://disorient.co/intersectional-feminist-zines/> [最終閲覧日: 2021年10月1日]).
- Murrell, Gina. (2020). Libraries Collect COVID-19 Stories in Quaranzines. *Library Journal*, June 1, 2020, (<https://www.libraryjournal.com/?detailStory=Libraries-Collect-COVID-19-Stories-Quaranzines> [最終閲覧日: 2021年10月1日]).
- Piepmeyer, Alison. (2009). *Girl Zines: Making Media, Doing Feminism*, New York: New York University Press. = (2011). 野中モモ訳『ガール・ジン——「フェミニズムする」少女たちの参加型メディア』, 太田出版
- Rosenberg, Rachel. (2020). Quaranzines Are Popular and Libraries Are Noticing. *Book Riot*, July 20, 2020, (<https://bookriot.com/quaranzines-and-libraries/> [最終閲覧日: 2021年10月1日]).
- Sherwood Forest Zine Library. n.d. Black Lives Matter, Policing, & Protest Guides. *Sherwood Forest Zine Library*, [Last Updated] July 5, 2021, (<https://www.sherwoodforestzinelibrary.org/copy-of-virtual-zine-library> [最終閲覧日: 2021年10月1日]).
- 香月真理子 (2021). 「作り手, 読み手, 興味のある人をつなぐ——生活の中に ZINE [ジン] の占める場所がある, それが希望」, 『ビッグイシュー日本版』411 (2021-07-15): 10-11 《特集: 究極の自由メディア「ZINE」》
- 田中東子編 (2021). 『ガールズ・メディア・スタディーズ』, 北樹出版
- 西山敦子 (DIRTY)・村上潔 (2016). 「ジンを「わたしたち」のものとして生かすために——フェミニスト・ジンへのアプローチとその潜在的可能性」, 立命館大学生存学研究センター編『生存学 Vol.9』, 生活書院, 196-226
- 野中モモ (2019). 「声を出す練習——日本の ZINE の (再) 発見」, 『すばる』41 (5): 187-194
- 村上潔 (2014a). 「[連載] 京都の女性運動と「文化」(全3回) 第1回: 序論——女のスペース〈シャンバラ〉の活動から」, Web マガジン『AMeeT』(一般財団法人ニッシャ印刷文化振興財団) 2014年5月5日更新, <https://www.ameet.jp/column/219/>
- (2014b). 「[連載] 京都の女性運動と「文化」(全3回) 第2回——〈シャンバラ〉以後, 1980年代のリブ運動」, Web マガジン『AMeeT』(一般財団法人ニッシャ印刷文化振興財団) 2014年7月8日更新, <https://www.ameet.jp/column/221/>

ジン・カルチャーの現在的展開とその意義 (村上)

- (2014c). 「[連載] 京都の女性運動と「文化」(全3回) 第3回——1990年代, リブとして生き続けることの模索」, Web マガジン『AMeeT』(一般財団法人ニッシャ印刷文化振興財団) 2014年9月26日更新, <https://www.ameet.jp/column/223/>
- (2018). 「[連載] 都市空間と自律的文化へのアプローチ——マンチェスター・ジン・シーン・レポート(全4回) 第4回: ソーシャル・スペース〈パルチザン〉から見るジンとスペースの潜在力」, Web マガジン『AMeeT』(一般財団法人ニッシャ印刷文化振興財団) 2018年4月19日更新, <http://www.ameet.jp/column/1600/>
- (2019). 「アナーカ・フェミニズム」, 『現代思想』47(6):170-173
- (2020a). 「ジン(Zine)」, 社会文化学会編『学生と市民のための社会文化研究ハンドブック』, 晃洋書房, 69;116-117
- (2020b). 「アナーカ・フェミニズムにおけるジン——ジンが教育/スペースであること」, 『現代思想』48(4):160-168
- (2020c). 「DIYの文化シーンとアクセシビリティ——その精神・実践・意義」, Web マガジン『AMeeT』(一般財団法人ニッシャ印刷文化振興財団) 2020年3月24日更新, <https://www.ameet.jp/column/2930/>
- (2021a). 「ジンというメディア=運動とフェミニズムの実践——作るだけではないその多様な可能性」, 田中東子編『ガールズ・メディア・スタディーズ』, 北樹出版, 130-148
- (2021b). 「地域のウーマンリブ運動資料のアーカイヴィング実践がもつ可能性——二〇〇〇年代京都市における活動経験とその先にある地平」, 大野光明・小杉亮子・松井隆志編『[[社会運動史研究3] メディアがひらく運動史』, 新曜社, 72-94

